



^ 13
2921
3



13
2921
3
門
號
卷

梅の春三編の序

梅の春三編の序
梅の春三編の序
梅の春三編の序

未明年一歳入ふまの春の神楽の昔

二白の美湯五町の廓を觸しめし

大黒舞の癖まをらばけ山集

庵の空守うもほご見ぬむしけをま

昭和九年
七月六日
晴

木場きばの遠景とんげいの和歌町わかとまちの巳みの刻とき



尾州石ノ門
合一
新乃
...



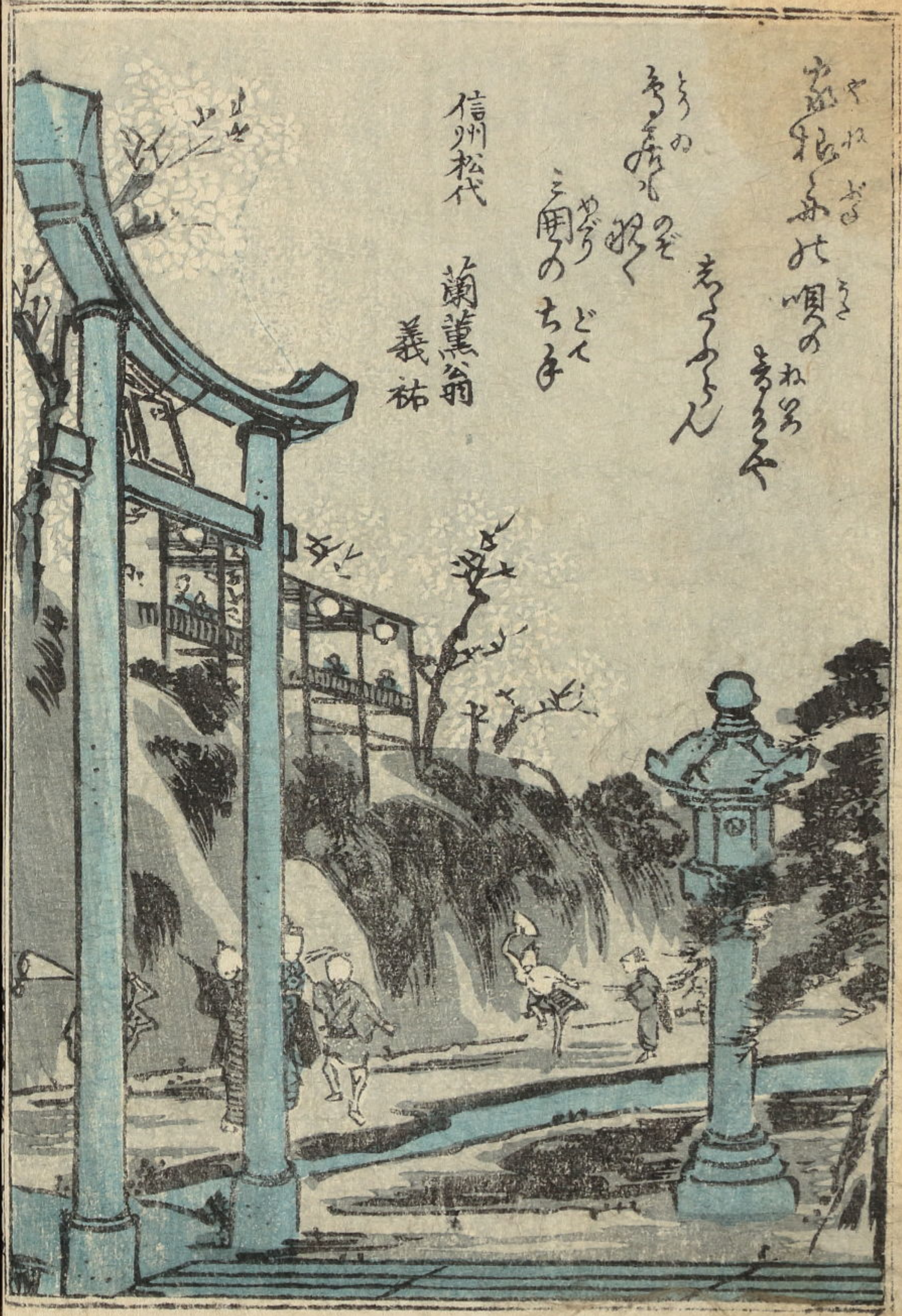
夏之里画



貞重



三圍の神狐於柳の災難を救
ひき福の奇縁をひまふ



遠く此の頃
 春の光
 三州のち子
 義祐

信州松代
 蘭薫翁
 義祐

梅文春卷之七

江戸 爲永春水著

第十三回

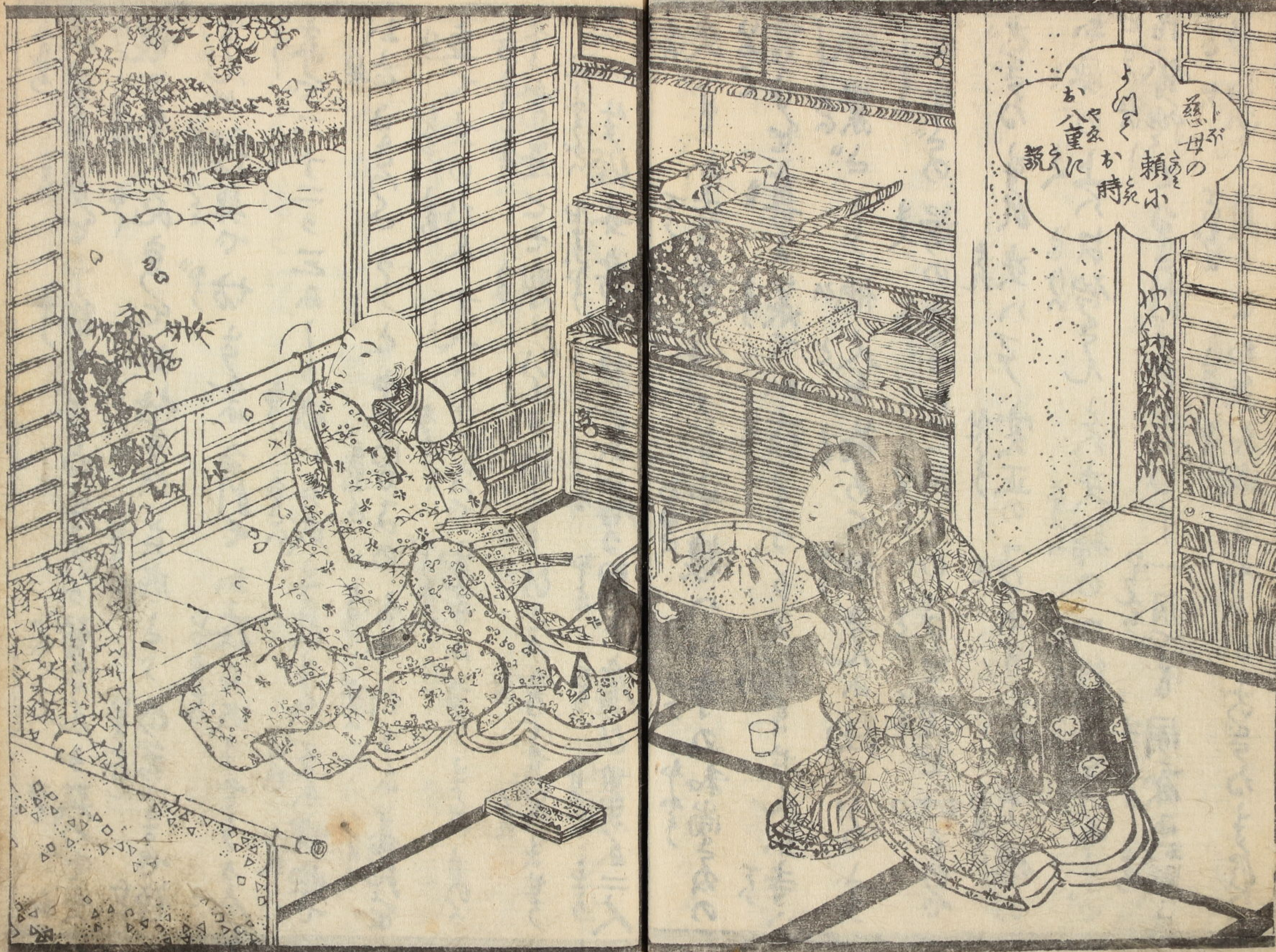
春の中へながる常なる花鳥川 眺日の園へ今宵の歌と
 なるるよりいとせきととて 誓ひの山 煙ハるけきも
 ぐさく男女の中互ひの思ひ 思ひまじく実と實と
 屋敷で長くあまつ 思ひの山 煙ハるけきも
 年月とそとなく 思ひの山 煙ハるけきも

人ものまじりて遊一けきまふ海戸村の丘の畑と町の
裏の古松木の垣のまじりて 雅俗を兼一庵ありらるる
ゆり六半路二十のよき多くも 越き入呂けりて尼ホー
色ひく白く眼元口ひく可きらりてあまの音の音の
勝と懸けりて自然の巻及とも 如く通直此婦人の
世ふゆりて黒髪の艶ゆる紅粉の化粧あまわらるる第
りやうりて美黒とあまらけんと 嬌せぬ者もあまら
とぞ當時如か 世心ゆりて 癖しき好み 住居入されど遠

見送の縁者のまじりて 身は不足らるる見送十
四女ある小女一人と仕ひ折糸の物徳女もあまら
毫の内 厭へく二棟線の音も 昏秋 繕るるひびく本
舟も好まらる客多くと存心と願ふを 接ぐ一が最まらるる
女連りて隅田の花見の儀一名 田南傳ひふ知れりし 跡は
尼の麻一巻ふ 留息をばて居る將へ止着ふまて松火居る
二十四の女の 大眼とくまはれりし 膝ひの方より 茶の焚いたと
あまらりて持心 女一も 茶を入直りしり

何れも詮方が良くと存候 けしきども半嬢ハも
今年幾業もあがり 仕仕まは 春ゆくか北一
どろおどろおせんり 何程お死まを言ひの 後次存候
出逃の善いごらと中て 存さんも モヤ お死まを成てうら
今春の四業もあがり だおどろおせんり 一周忌ごらと
他所へ生れうらそ 高きよと言ひるを 國まーうら
宮甲存さんハ 他所へ生れてお出らうて 今春ハ 女
おさんハの 小思で おどろおせんり 尼へもく 然るこらあり

夫でも お寺のよ 女ハサキ嬢ハ お寺の 和尚の
言ひを 真ふ 養てお在さううら 行ません お寺ハ
職業ごら 他人を 勤めて 坊さんハ 仕ごらうら
後生ごらの 前の 毒ごの 種ごの りを 空と 仕くのを
おどろおせんり 夫ハ 正の りの りの 一ら 半嬢の
お身の上ハ 只存さん 夫夫婦の 中 約束ごらと せま
お婚後と せま 何ごの だら 一目ごも 同床ハ 眠と
ゆらあー 貞女と せま 成も わびが おどろおせんり



お母の
頼み
よめ
お時
お八重
お重に
説く

不吉なるゆゑ中絶せざるまはたが産まらんが残つて是
嬢が先へ死なるとお仕まつを成しむは常まを倍
さんが獨身の坊さんふ多門でお在を成させうら今
年で二十二の三ふし成は成まはまふ百ふ恍惚て
お仕まつらうと中を男ふのむで付しふ義理を
立て女のたふ十八や十九女で産まふ多りまはあつ
その産産ことを樂しむといひし言てもはるまは
が一生涯女房を持ふ居る男が廣く世果ふ三人

その存するまを年代記とわらふも書載らぬま
せう実正の半嬢の貞女とおまを成のく誰も賞
てくおまおません尼しつち……然らうまはけき言て
おまをさうらても眞はみおま尼は月日のく他人ふ
おまはもはちりふもおまはヨは産まんのおまは成
しのがあつしつちを樂しむてまはまひも直まはつ
男の誘ひのせおま七尼はまのこのころ可憐な
男のおまをわ入女一サア使があつしつちおまは入

夢を心得るより一被十二回の末に爰とのいふを
看官小告をたまはる文段の事も爰らうし辭を
綴らざりし腹稿と執筆し門人の彩遠に校
合の誤りありて取十校の新板ゆゑ全く春水の
兼漏のよみそり所ひらまきの端若しより一
見ゆりしと爰と頼ふものあり

斯てお時の飲食の支度など調へて主の尼の備の
用意をして居る頃六普門院の鐘入相を告げ座の
候礼をさう櫻花のちりくと椽側へ散り風情閑
清なるゆゑに方多く他視小とをを流るるが庵主の
尼の体相のいふ

あまもまご入相の鐘のちりもせん
外山の椽候初めけり
と詠まし様うらひいざし七花の夜あけ會の時より我
らう嵐のまき入りしと目撃すふまがみし尼の公根をん
ふも又歎くしけり

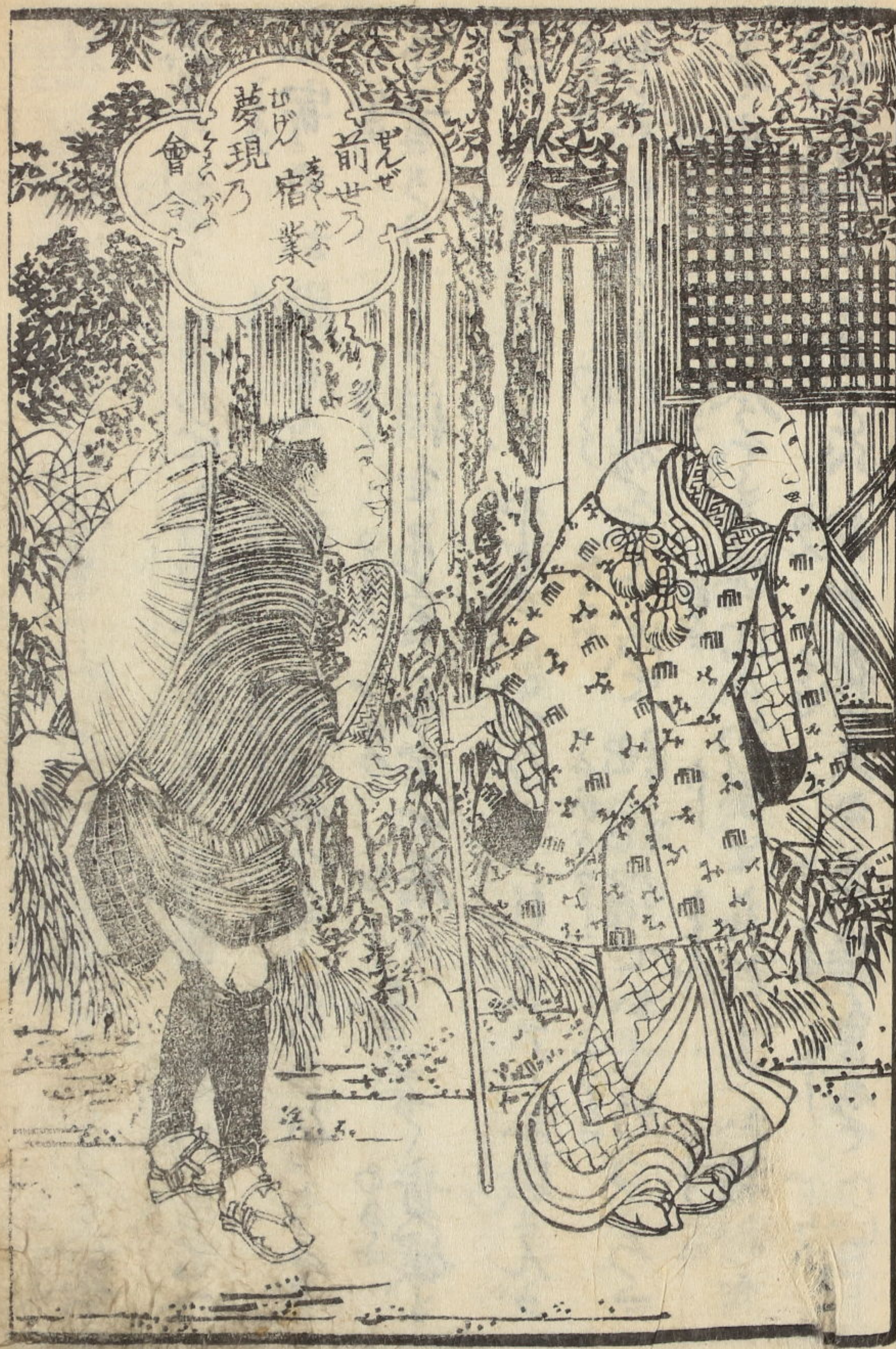
第十四回

再滝お時まきの義よ七しちよう 糸いと思おもふ由よしられらば 養やしの世よと世よのみ
最もうもち 解とけけ 風かぜ 鳴なるる 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ
尼に一ひと 竹たけ 故こ 以も 本ほん の 名な 成なり 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ
他たの 比ひ 立た 尼にととぬぬの 指さし 佛ぶつ 門もん 名な と 中ちゆう へ 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ
も せん 一ひと の 世よ を 交ま へ 左ひだり 様さま と 先まへ 刻とき の 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ
男おとこととぬぬ 八やち重ちゆうととぬぬ の 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ
時とき 読よ むむ 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ
親おや 川がわ の 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ

八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ
一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ
一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ
一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ
一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ
一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ
一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ
一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ
一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ
一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ 一ひと 八やち重ちゆうととぬぬ

男もゆくは さまぶか時が 行くとうち 解くくる 懸言
み 苦擧のなる 何軒やう 除く春を 満息と
仕むりあり 正お八重さんへ 貴嬢ハ何と 思ゆ
まはくは 存かきせんが 無人さへ 内の孝行の 多くこそ
みまが 捨てお仕着 身成りし 何事今 今度世人 出
控じと 極く人 出来ません 後生頼 頼も 養子も 母
内根の 内公せ 安堵させ 申てこそ 神傳の おもも 叶ひ
そのる ありて 志ざりませ 同床も せぬ人へ 貞女の

道の 標のと 古風 望ひるを 在作ても 未承と なる
皆まんが お賤しひ お返りり お禮の 沙汰が ござりませ
たが 室の 下 標の下の 力持と やうを ござりませ 下
世間 大 衆人も 美男が ござりませ 久く 何事ぞも 貴嬢
の 内公入る 人を 擧げりて 内縁を お結び 成ては 尊
まへ 母は せんそ ぶお 兄上さん も 内親類も 内一同の 内
安心 成りし 何事 おぬを お改め ぬと 一と 終成て
在下 せし 左根 ありと ござり 終も 何事 あり 有真唐



花見や芝居のの儀をこゝたきありて見入るる
さうり 夢う言ひてお尋ねでもまろ 何れも先刻の空へ
お寄のお賤さんの様へ 笑み入るる色あひヨそとま
ト言ふけしうが 後を不吉言を言て居る 貴嬢も
アお気の難ひもやぶがとどろかすにアノお賤さんが
何れもマアお化粧を成て 他視張てお歩りまらう
お貴嬢が今でも 鳩田のお髪を束ねてお振袖を
召らまはでうけまらば 何れも花美る夜顔をもぞいば
お

はせあうく お賤さんかひびもあひひてお尋ねまは
貴嬢のお賤さんよう お察が三方もお下でいふま
せんろ 実正のお貴嬢がとどろくお嬢のあひひ
お成るまらうと交を 貴嬢のまらう男のまら
あひひるる男の人のと大強をぞお尋ねまは
尾下をいふ言はるる言とあひひのいひヨ 誰人がお
極るものお尋ね人があひひのうらま 貴嬢とあひひ
卑下をいふ言はるる言とあひひのいひヨ 誰人がお

居るものが幾人のうらなひもあらずしうしはせんハ交ハ
左様と云今貴様が何う言ふけとお止を成すしうが
何うの後にを伴する 尼ト云ふも多しヨ思ふ何れ
下もね縁を結ぶるゝ思ひ切れて居るヨトしおの時
備と體を考へ居るうしは彼南無の縁のうらまはしの
希冀のうら 何れやうしを時か八重の公はあつらんも
さうし行尼のうらゆゑ詮方なくしを身と云ふ言ひは
さうさうし一むと云ふ今も猶も人さうでんと思ひ徳を
世の中成さう多く悟るゆゑあんと推量しうる也

是「アウ」私が考へ付ますとさうさうおまます子貴様の
おれ私の考へ付とさうお相違あるいと秘知すまはさ
必す私の考へ付し私の考へ付し私の考へ付し私の考へ付し
あつて側不居ておれのおあさうら居しおれのおあさうら
予さうの考へ付し私の考へ付し私の考へ付し私の考へ付し
さうさうの考へ付し私の考へ付し私の考へ付し私の考へ付し
せうが子。アウ 河紙でかき書かす親川のお方さうし

梅ふかあるさうあるさうなむらぎむらぎませう子ト云いしとく
か八重の物りー新赤らありう終らうて
けまの物りーてまねるさうあるさうの及みの物り
字 一上女の積集のおか一ツを不及とあらうありて
連中世の中へまう入つて男とあはるさうあるさうの及み
あるさうの及みの花の勝らう然る物り物り物り
一生に男の物りまのやうなり尼あるさうの容形で居
うんとあうるさうあるさうあるさうあるさうあるさう

梅お八重のいさむらうしく思ふとまじぶふ強て
おの巻と語合けり

是よりお八重の物り物り物り物り物り物り物り物り物り
首のりー

梅之春巻之書

しんせき

梅之春卷之八

江戸 為永春水著

第十五回

夢ゆめの浮うき春はるの見るみる夏なつの思おもひがけるま正ただ夏なつのまとと扇あふ屋や
 多おほくく悟さとりかくま亦また人ひと情なさけのう疎そしとといいらんんうう爰こゝのま真ま河かとと
 りりるる町まちのの大おほ黒くろ屋や福ふく右みぎのの酒さけ問とををりり主しゅ人にんのの三さん十じゅう
 七しち八はち方ほうのの雄おとこ名なとと嘉か北きたとと稱なづ美みのの初はつ屋やのの通とほ人にん多おほくく
 志こころがが一ひと個このの男おとこ子こののあありりてて福ふくとと助すけといいひひ今いま年ねんのの年ねん終しゆう十八じゅうはち

もきども生得病身ゆゑの世の常の子供より容形も
ちのまじく珠の物知らるゝるゝる性もて類くさるゝはさき
さるゝる風俗を向のて眼まきやうふ口えくゝわくゝ若元で
居ても娘のまゝとて思ひぬ者ゝまゝとて思ひぬ者ゝ
やゝもあつて危ぬ角昔は風俗の名家の血縁の一人も
さるゝる西親の案も大さるゝるに兼て出入のお医者も
らせ久く薬を用ひれども一向の驗もさく日増し
乞ふゝ減らう瘦てゆくゝ色青まら最覺まら大病と

ありしゝ家内の終るゝるゝりも更まら親類縁者公店の
人々毎日の見え音信て彼所の医者け所の療治と種々
相談し安んじとむを尽せども更ぬを申變わらざれば
さるゝると評あしけるがま頃武州松山の筋弓稲存大明
神と申すゝるゝる無業利生をわらゝとて祈る所の神は成
せどとりのりゝるゝる珠の別當何某の神徳が盛んまらゝと
大志願を發し日渡摩の修行をなす中息を延命
と祈るゝるゝる大黒屋の親類礫川より伊勢を吉ちるゝる

めのまゝに 福ちうふそのは利を物語けまぶ 福ちうふ
 者ありて 福ちうふそのは利を物語けまぶ 福ちうふ
 信を免し 牌福の物も全波と約り存らん代
 悉を立護 摩終りを願ひせしが 主代末の者帰る途
 也 歳の物家に出合をまじり 路連とまじり 不保福の
 痛むのり 赤松山ある 稲子へ 全波の預掛の
 占トと考へる 体よりか 代末の男の 病 藤 一 毛ある
 びがうい 藤もいなり 代 一 五 左極むむむ 先言の
 藤 一 毛ある

福を極むで 老角ふもが 藤信と 中まひうら 藤 一 毛ある
 然ていびいぬ 全くまじり 邪祟が 七居るの せまう 藤 一 毛ある
 ちうでい 活る 目ひるひうら どの世のうを 鎮む 極む 藤 一 毛ある
 まじり 加持でも ちて 藤 一 毛ある
 加持の 藤 一 毛ある
 けんは 藤 一 毛ある
 は 藤 一 毛ある
 の 藤 一 毛ある



御利生の
奇談
神靈(泰詣)
松山(前弓)稻荷の
武藏国比企郡

言ふも夢に見る尼のりも娘のまも弟世の約束の
うら遠慮をさるるふ及むくしつと世をを氣給せだ他の
頼のも叶へる後とて言國せるが芥一やアイヤおのりさ
るふかて隅田の三圍まをわねるふら實後と別れ
中ふと一書くと思へば多らぬ板橋の舟の東端より田南
道へ曲ると直ふ旅僧の形は消えてうけも見えぬ
あつの大黒屋のふ代と抱への尊の者もふ願を見合
せしがん人さぬ旅僧の若し切の足偏ふ松山と曲の心若
きんと公付た勿体なく亦氣味うらくもま〜いさる
うふ何然の方せ伏拝と路を多ひで真向の家小並り
福をまつま帰ふ若者委しく清りけりた情と途中の
るの旅僧の上直と考へ全く築る福者の内利生の
心若く相違う〜と考へ〜懐んで旅僧の言へるま〜
福もゆさぶ輝ま川の人業のふ所へ別産をあら〜入
女男三人程を舟を病気の保養をるるを〜とさ〜ひま
めりり心利する人を標〜しが喜ひ喜兆の〜とさ〜する

言ふも夢に見る尼のりも娘のまも弟世の約束の
うら遠慮をさるるふ及むくしつと世をを氣給せだ他の
頼のも叶へる後とて言國せるが芥一やアイヤおのりさ
るふかて隅田の三圍まをわねるふら實後と別れ
中ふと一書くと思へば多らぬ板橋の舟の東端より田南
道へ曲ると直ふ旅僧の形は消えてうけも見えぬ
あつの大黒屋のふ代と抱への尊の者もふ願を見合
せしがん人さぬ旅僧の若し切の足偏ふ松山と曲の心若
きんと公付た勿体なく亦氣味うらくもま〜いさる
うふ何然の方せ伏拝と路を多ひで真向の家小並り
福をまつま帰ふ若者委しく清りけりた情と途中の
るの旅僧の上直と考へ全く築る福者の内利生の
心若く相違う〜と考へ〜懐んで旅僧の言へるま〜
福もゆさぶ輝ま川の人業のふ所へ別産をあら〜入
女男三人程を舟を病気の保養をるるを〜とさ〜ひま
めりり心利する人を標〜しが喜ひ喜兆の〜とさ〜する

よわいよわい 米大更と思ひけり久は度のもを巨細の得とある米
太夫の心を頼りて嘉北の内をわたりて福助の實の
母は毎年の移り通ひて看病一医師も二人はまわつて居る
同様の見を療養ありと云ふが或時米大更の
福助の心を頼りてとあると米大更の側は種々
たゞ一たびとあると云ふを居りし今見れば例より病の
なるなるおぼしむべき折しとあり米大更は嘉北那
予おのの中は物を考へておを病で史が病の
おやおぼしむるませんうと亦ありとあるは寛くて被
せと苦勞のみを成とせしむるは病の病を
ト言ひしを福助の物なり一福五十二の門を居るは
見と人か病と史とありおのて居るのこりよ今を
私が讀みし由とせしむるは寛く入る一亦是の見と
當人の此身の史も不鮮なりと云ふ他人の世一のは
ありしものが寛の病と云ふ米大更は病も不鮮なりと云ふ
は病も不鮮なりと云ふ病も不鮮なりと云ふ病も不鮮なりと云ふ

は病も不鮮なりと云ふ病も不鮮なりと云ふ病も不鮮なりと云ふ

古風の魚類のでもいふおまはまのながらうかたを成
 るがのうませうゆでもお強しを成さるもか出しは成
 多輝米太史が身小引得てお強さるのをも信まはる亦
 お茶さんののりさうら唄女や娘のゆきさぶ向ておを掃ふ
 こゝの男校でお在歳一金浪の由不自ゆるるのいふ
 内算一るのいふのいふ一ゆでもさるやのを成強さる
 いらのとうぞいふおはのせ里非今日一思一るのみいふ
 秘の明しと下す一ト実意をのりて米太史が四回
 説くまが福の如く起直りて福一を直りてお茶が信切
 言のておまののを強して居るも要いふらと太史のの
 ち近頃見し夏のる強さるらうるさび笑つて居る
 きんぬ米一と何れゆくとお安中程を笑ひまはるさる
 不実なるがのうまはりや何卒委しくお信を信ま
 福一史のらび強さるが馬鹿くく一をのりさるらうる
 まるごころふ米一とく長ひ續きまのが流りまはる
 成天長く十編まもつごのが直さるるま福一

古風の魚類のでもいふおまはまのながらうかたを成
 るがのうませうゆでもお強しを成さるもか出しは成
 多輝米太史が身小引得てお強さるのをも信まはる亦
 お茶さんののりさうら唄女や娘のゆきさぶ向ておを掃ふ
 こゝの男校でお在歳一金浪の由不自ゆるるのいふ
 内算一るのいふのいふ一ゆでもさるやのを成強さる
 いらのとうぞいふおはのせ里非今日一思一るのみいふ
 秘の明しと下す一ト実意をのりて米太史が四回
 説くまが福の如く起直りて福一を直りてお茶が信切
 言のておまののを強して居るも要いふらと太史のの
 ち近頃見し夏のる強さるらうるさび笑つて居る
 きんぬ米一と何れゆくとお安中程を笑ひまはるさる
 不実なるがのうまはりや何卒委しくお信を信ま
 福一史のらび強さるが馬鹿くく一をのりさるらうる
 まるごころふ米一とく長ひ續きまのが流りまはる
 成天長く十編まもつごのが直さるるま福一

新板歳々小敷百部...
八文守屋の古き...
知向を借...
今世の中...
新...
松まを比...

第十六回

再説...
米太夫...
思ひ...
今が...
...

とぞおまは其宿の主人たるうらふくと思つて
成すはとけりません元を帰るべきに
おまはません廣大世界でござるまは
婦人も幾等もあつたおまは果ては
らうが處女がらうが早速お世話を
すくも永く成す一途を鎮むる通
ふ通ふかぬども有難嘉花の
まはま真成り福も始終を
聞て居るうら

いと信切りの言葉を悦びて 福一
久いおまは おまはまうせらるる
あつて思ふまゝに 是も
雄みらうともねと自分
うらを喜ばせらるるね 米
思つて思ふのね 夫も
世をふの思ひがら 若
でまはるまゝのサ
とぞおまは其宿の主人たるうらふくと思つて
成すはとけりません元を帰るべきに
おまはません廣大世界でござるまは
婦人も幾等もあつたおまは果ては
らうが處女がらうが早速お世話を
すくも永く成す一途を鎮むる通
ふ通ふかぬども有難嘉花の
まはま真成り福も始終を
聞て居るうら

さる見の然りゆらん 景清の勇士も 現げひ
き情の思案の外トのいふや じふかきせんりの
わど強ひる勇士でまも 輝女も心を賜たまへし
るませんり昔をま入 夢をさるるものも 當世あたの
情のゆり 誰も 笑ひ 振る 手書きの者ぐりのゆりゆり
ト 種くと心を 厨のけきぐ 福も 物も 花も 心ひせ
會あひ 福へ 大まうの板の 味を 引合へし今
志す時代 流りわぞ 米へ 花は 咲き 花は 咲き

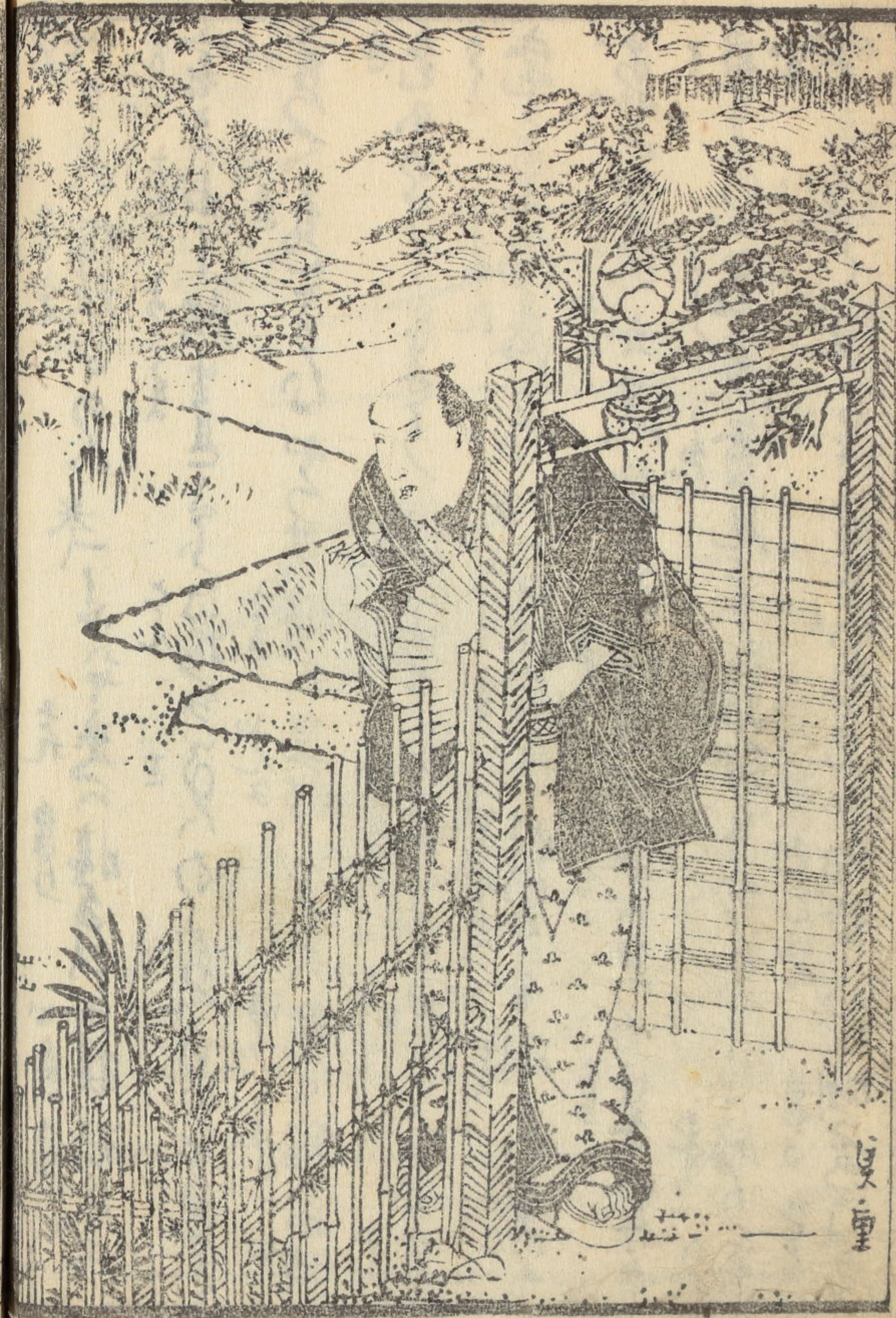
狂言でさく 古わらふいもの さいころし ちや ぢぢぢ
ませぬら 夫も 赤板の 赤板の 赤板の 赤板の
時途中の 辻堂の 茶で 類を見合へし 寺の
お墓の 茶で 再交 女を見合へし 女の見合へし
一歩 同い 旅宿の 宿へ 止宿 命と とき 茶の 飲め 愛め
も 見合 尾と 娘が 意ひ ひと けり 古風 女の けり
あつと みる みて 見る ひと 中夜 女が 茶屋の ね みる
さらさら けり 見物 女の 不 解 みる ねが け ねが ねが

中ても羨の所と羨を多し所と同じそあしが壊く
即時考へますとも何所が羨で何所が眼赤不在
場所 ころはらへしむねおまおまはら

ト第の所入侍女の真こりり十入す女の娘を
者美花めと持まう電氣おまおまをさ
あそ勝のへまてり

夫へモ 風程可電らへし娘でござんかまふよ おへまを
けを捨てけ頭へ桑門のねあるのてはうまひさう女へ

ららと眼赤付ませんぐけの方のり女へたらやど且の娘で
びいおまひよ 大才旦那のあまふ入びいおまは
入るに 市振投お糸の心喜ふららと媒めとはあま
米へイヤとん 喜ふゆりそ有るひがあろ一居物合でい
まふら先あおのやて面でも冠つてあつ時ふららと
甘くは酒で法回かあつて 飲込の酒で肴高か
言ふおまふらら 指へ肴高 ころころいしおまおま入得
あふ能くもや白ひら。イヤとろ一女美あまはらららと



眼をいそぎしとまきしる

古今和歌集の在るの業平の書状の意致のよきものなり

見せぬ人の意のくつわきけりや花のうらみと涙

けん思ひをきくもよみかたの月日の武蔵のついで

おもひの休伴其の利益かゆのうらみと涙のついで

あつち中膳の楽のうらみと涙のついで

ける福の助のうらみと涙のついで

心の夕月夜雲るを偏七花へうらみと涙のついで

くしを思ひの君がとりの思ひまする正後覚やとまきしる

あつちの迷ひのゆき頼の霧の今くらしを

解もさうまぬまうらみと涙のついで

度の面影が移る梅の氷鏡光る木のうらみの月影が

さうとさう心胸の疾とまきしる感ひのひらうらみと涙のついで

あつちのけしきとまきしる具那まんエかをさう梅のうらみと涙のついで

お在る成すまきのたまきしるまきしる保を

まきしるとまきしるのうらみと涙のついで

揚卷脚六昔ものごころふし七け頃りてなを
人情本とるるふらうて古今事代の一趨向
作者が久く腹疼せし事法のよまへ人情本の中
よき倦のひーえんぞ安ゆる者官史の目も朝一
草紙より

一刻 梅の春卷之八
千金

一刻 梅の春卷之九
千金

江戸

為永春水著

第十七回

我々の知るぬ山路ふあたるふ感ふ心をびーくけり
實不は歌の如く急路迷ふ時ふしをまう現の見別さなく
て悉く鳴ぬ堂の此と焦む思ひの猶も十寸境後れは
世の中ふかすぬののた昔も當世も貴も穢者も別
る互不思ふ文字措の君史人心礼徳の振く苦ふあはぬも振

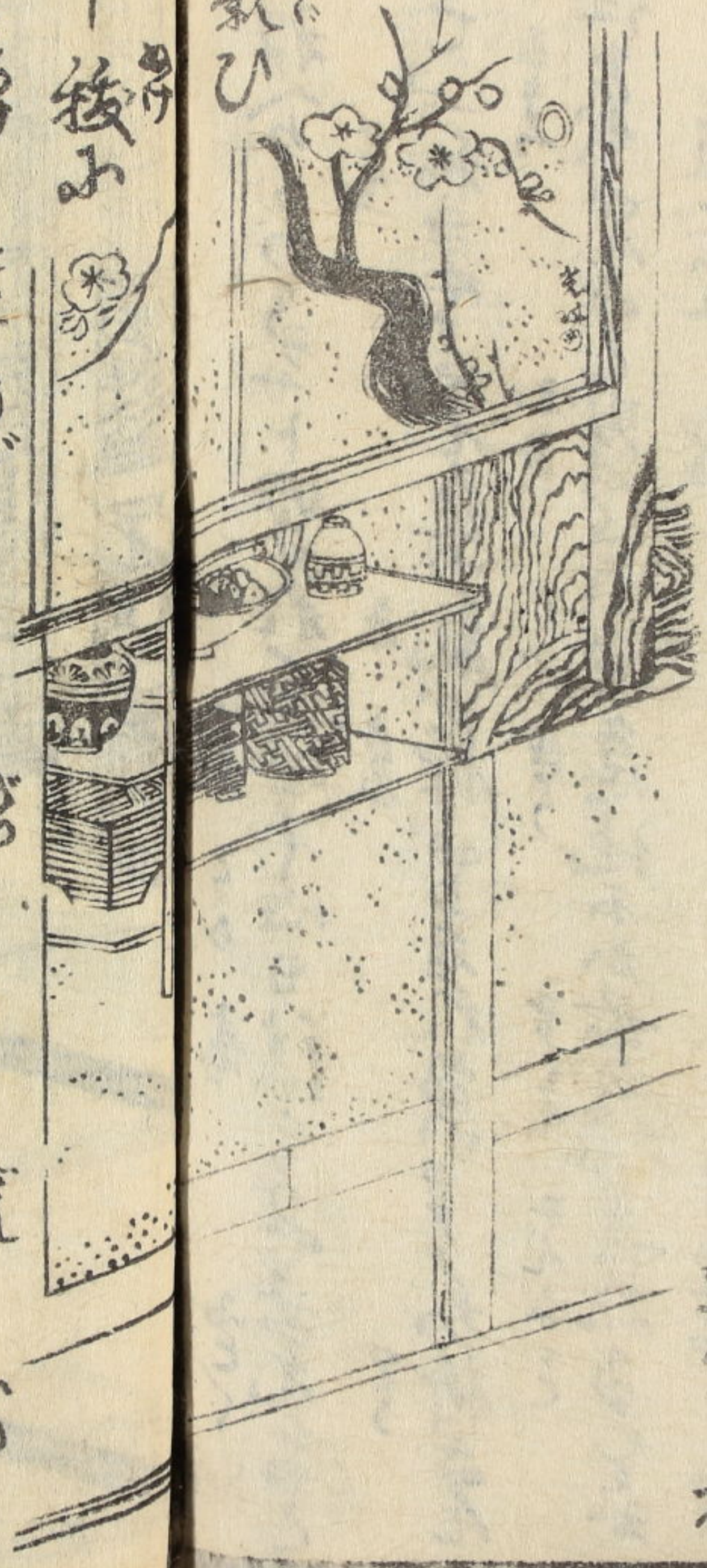
むく笑顔の有様さうとまきうては弱女の姿を永く思ふ
あるべし愛小玉八と七三郎は柳のうや何やと噂を互に
睦しく惚つ惚の中あれば斯もあうと思れらる玉八は
七三郎の傍へ寄て玉八の子が柳さんの締を仕らう直らうと
七三郎は此も寔に困りて居るに限りて何所へも當分の程まで
やうに思ふるめくぬぬ姉上が来て頼る今さうつ別れても遣
とも仕り人あつたわりの困り小玉八も寔に困りて居る
どうも夜に寝さず情熱うらやま正可捨てもあるひ何卒
か

八分は此の扱ふべく仕てよと云ふ子因ふゆゆの扱ふて自然と
相談を仕るくちやア片ねくせむと云ふと寔に何時か今日まで
起つてさう日が永ひ扱ふて来日暮るや餘程の間があるア
故其扱ふ日が暮るのを候と云ふくは情婦でも晩な處の
それと云ふ遠ひ出されるひうち小玉八は何事をも初て仕舞
まきお前さんの傍を別れちやア寝さず居て居る氣にさうく
まひくら河川へ心も飽てるげて死に仕舞さうと何卒可憐な
ごとく思つて香たやも向てお涙を流す一ツ涙を袖で拭ひ

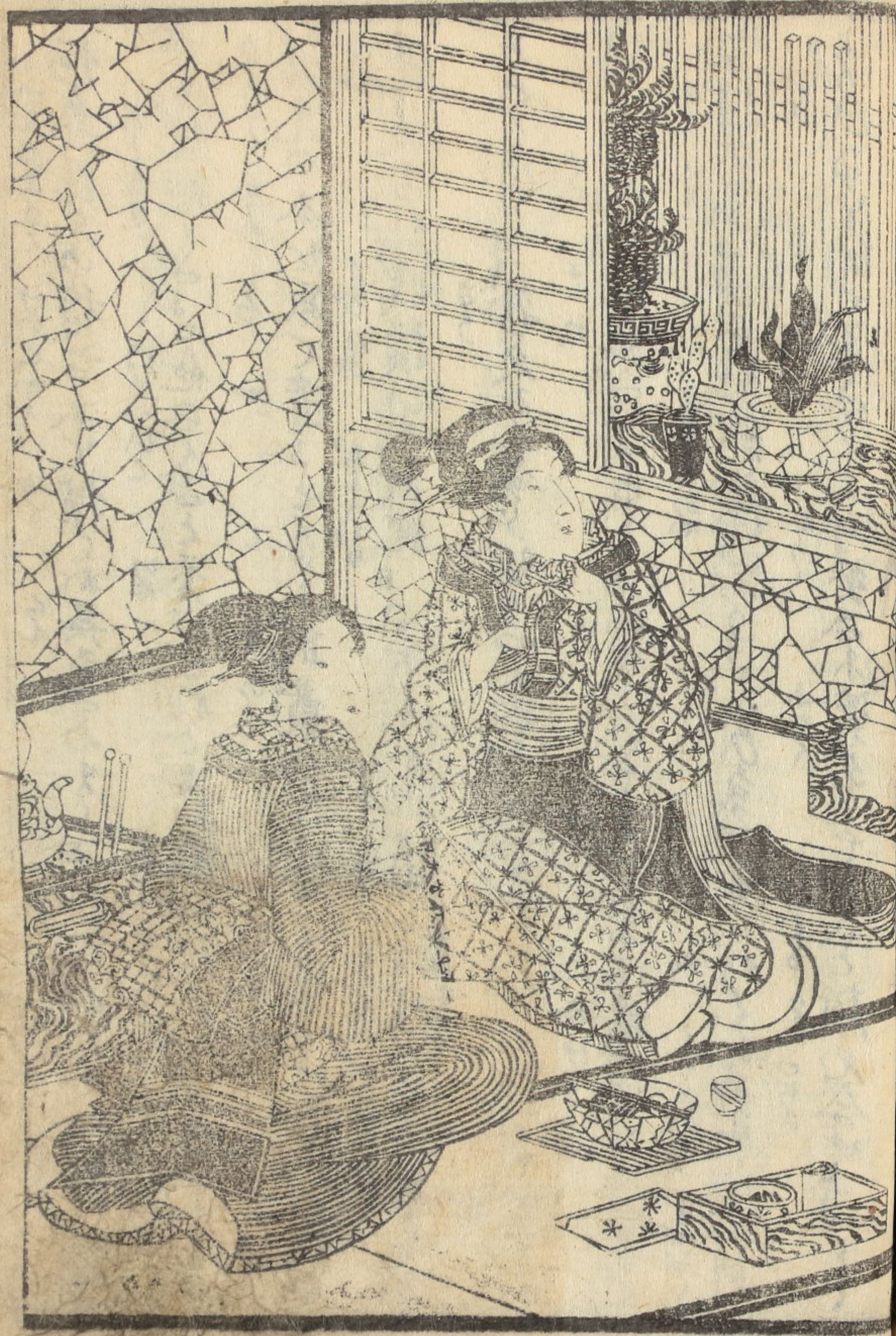
さあぐと泣けぬと三郎の八八おむひ七何とあう仕る玉死の
光 光 光 生るのと能く死んごのあうお小徳男でも出来んえごうままご
く種々のゆとりで世相をつらうて此世と縁を切る氣人
玉ヲやくす何ぞを言を成んご玉松きう度おもひも仕るひとと
其程いふ徳志ありありまきんごお茶松の心を引で見えん堪思
しとてえんさうのまうくこれらうの決て其程の言まひらうまき
そん めん めん 其程お氣おきで難くもわら 此世が有る不安心ごう
氣といひの帰とらふのいごう正直と言るても毎日く情お

たうりも居わらうのまサトつれて此心も徳まうてきえおと
笑ひて念とて「私きやアとえあ氣が探らうまれのヨアアお折さん
とてゆごあ仕を成んごと思らう子エ急地お茶松が其折るをが
いひを成ごう子 是は後か胸がごきくまるヨエ玉ごふり仕を成との聴
おらひせ何とておはんご玉アお茶松も言を成るとお仕ご子エ
竟それお松まごのいそくまうの玉堪思てお異か子エ玉餘程
虫がいひかア此世が方お些とむも謬があるといふ下らとてあて
自分の子ぬ形通りごア時お胸の動氣のぬわご玉「玉おく私き

のやア不鮮多の三何ごう種なるゆを伴ご子完先刻の能なるこの正
 自分色を狗へをに入れて見て莞尔笑ひを催し玉ヲヤチ未だ
 が動くヨ七えん少計は従るさわかまてこよけ此が香るて能も
 相々難を情男の由して貰ひ成へ一実がるひまア二か前様でも
 ちやア子くありの仕ませんの子ト互小睦く弟お折しも近所の者
 とをあるて
 隣子の
 外より寂い



おがら出ー後ふ
 昔「あ貴ののそ付く其処動くる」ヲヤ悔りるる「離ごとも」
 昔「あんろ香る身色ご子昔ナクニ餘す」急いひてうら出床損るる
 昔「あ色ぬやア餘浴骨折こらん」が年を重くさ蓋が被せひひ
 昔「あ山ろこ」ヲ「あ未菌の抜る処がやあるまひヨ若ひらせお昔」
 昔「あ有難ひき伴買ふ子」ヲ「あき伴でも二伴ひりか買」ヨ「あ実」
 昔「あアそふと此と用があので」あ「あ」
 昔「あを忘れ」ア「あ」



女師花
出たは
珍船
永春

いふべきよしと けのこかん けん えん
何年遠元の稽古本と借てお異さ力す 玉ヲカク肝心のは用かりつ
でも後廻しご子 他の人ごと否ごけれどもお茶の締ごら借て上る日
きよものとかん ちや て ちやゆき
遠元の本と取て違るともお取戴ひて 玉アラ有るやと云けるや
是よりあれが我預ひも成就 玉ヲホしお止 玉聞ふ何れお骨かおるる
まれのひヨ吉 然久そんるら 仰りやま申すヨハイさよあるら 玉ヲヤ定るら
久 ちや ちやね 久 久 ちや ちやけん
仰り久平の仕着ご子ヲホし 玉聞るといふと大さおは機嫌ごア玉ヲソク
ア侍ひごヨ吉 これが別親ゆづりマトひきさうして移く七玉身先判
よりけりて聞て居るら 玉可笑さ小覚おしと云ふと顔え合せ 玉ハ
あくら ちやちやね
ア侍ひごヨ吉 玉聞るといふと大さおは機嫌ごア玉ヲソク
よりけりて聞て居るら 玉可笑さ小覚おしと云ふと顔え合せ 玉ハ

いんごつまらぬ用ごア 彼奴のお蔭で可憐処と慕おし七仕着ごア
玉 不んお能氣なれでありまは子 人の心も志るるひで戲言なるら
ちや ちやちや ちやちや
言てらら小私さるんごらごらぬ物 氣お終日ありていんご子大何れ
でもお能氣ごアお久人小なるら 氣を操せて自分志るる情人の
こと ちや ちや ちや ちや
ちやるんごと思つて居るんごらうはるるるるごら小付ねごア玉
かんごら ままね いら ちや
正実小お茶拵のよる情男があらと子 氣ごりめてく 今も心も短
く成る拵ていけるひ子 道理で無間小お殺情と思つてらモウ
ち ちやちや ちやちや ちやちや ちやちや ちやちや
方のは断りち子 玉アお茶拵ごアはごらまをんヨお茶拵が浮氣ご

か溢るやうにまき「お前が尾上とく平餘と自惚言ふれど喧ぬも
あんなあつ あんならうと ね
如物眞実のある婦小競てお呉ごうと嬉しひヨ何年何れお七さん
も私きを沢山可也がうて必浮氣るととしく氣と採してかかれ
でるひヨモツト夫の此世の身でいゝるど浮氣を籠者活業
せえ 世間小影も好権子らるるんごうひんまるでりして
おれ 此世の面を汚穢ぬれ振ふして呉るがひのサト互ふ顔と縁ぬ
つ千結も口鏡も嬉妬も惚と中とと猶さうふ可也とまもる
娘一まづつりて沖の石人ともまらぬ花くもも此とまふ

雨の淫とと後の涙のむら雨時あうま小恬然と濡ぬをぬれ
濃るる濱の眞砂の教とや拙き筆の今毛小尽せぬ中ととを
れけり當下糸吉の妹のふも案づられそれお付て種とと相
鏡もありけれと抱の此るれが氣もいそがしく鬼小角安堵あう
されが古やせん古せんともひくが朱七三島玉八中も語らふての
上おと心とさごめは家へ家のを門の障子を明て一は免
糸吉さん久サアおよりお成ヨ
糸吉さん久サアおよりお成ヨ
糸吉さん久サアおよりお成ヨ

とあるゆゑの程を陳て火体の剛へ居りて笑を合ふる氣
の毒をふふ七三郎不むらひてアタラセえ工お柳がふふ付て
宜とお紀をうひまうて有るごうごうままヨ何年能くふお紀
中まに下何お正頼ふ葉にもなるお柳の子人の世話ア他が
仕るらちわアまる者ぐねり子るんご由此他お住してゑま
さるがゆゑ一ホニ信切おを伴て下さるまにのあふり海ひ
いねんあり
因縁でござせうら子へ彼通り爺の律義子で益ふまき母
うらおお柳汁が便でござん
ヨトおまをまのく柳ををいよ由娘頼の
おん下らお柳ありは思ひはける

第十八回

却説鬼若松の流九糸ハ寺持の正徳ヶ伴へ由ま
尋ねてお柳の性方一向お知とるゆゑ是程と
三糸が方々姉の糸ハのなるゆゑ隠しなくおちがひ
あるまゝと後程一いよお再交婢を川の方へ引り
その勅棒をうらひぬりたるが七三糸の方へ
柳ひあふりたごもふ小塚と和奇町お柳を
園庄の田目といふお柳ふ心をもて者ありてを柳ハ

も田畑のしまがりなる百姓の家のるまじく随り人の姓
 ませぬ新あまよ世をまのぶ小使りようしとを付く處か
 へお柳をあげけをききるお免美松の方の掛合をかこ
 づけんと場して整く整けを治九糸はらさるもまが付
 ぞ田入日和奇町の迎をうらひ随り尋ひあぐさへ
 日月の夕方ひつ目の友達の方へけんといひまき宮
 目の田甫を通る柳もお柳はくとお柳をさへ
 隣の家の香風も入るりお柳はくとお柳をさへ

治九糸と下交り合はすとお柳をさへ目あぐ
 足付の治九糸もやお柳さんうらむ心も合はら
 てアらんまお柳さんうらむ心も合はら
 ハ柳さんうらむ心も合はら
 清浄方あるまよとあり可く用はありけを
 来て居まらか子お柳さんうらむ心も合はら
 けまさんとするを男へ列とてコレサくせんな平
 なるまよをうらむ心も合はら



△^{きり}コウ吉やア先刻の
をまよなごり
婦人跡始良藤ナ

どうり我おとちも

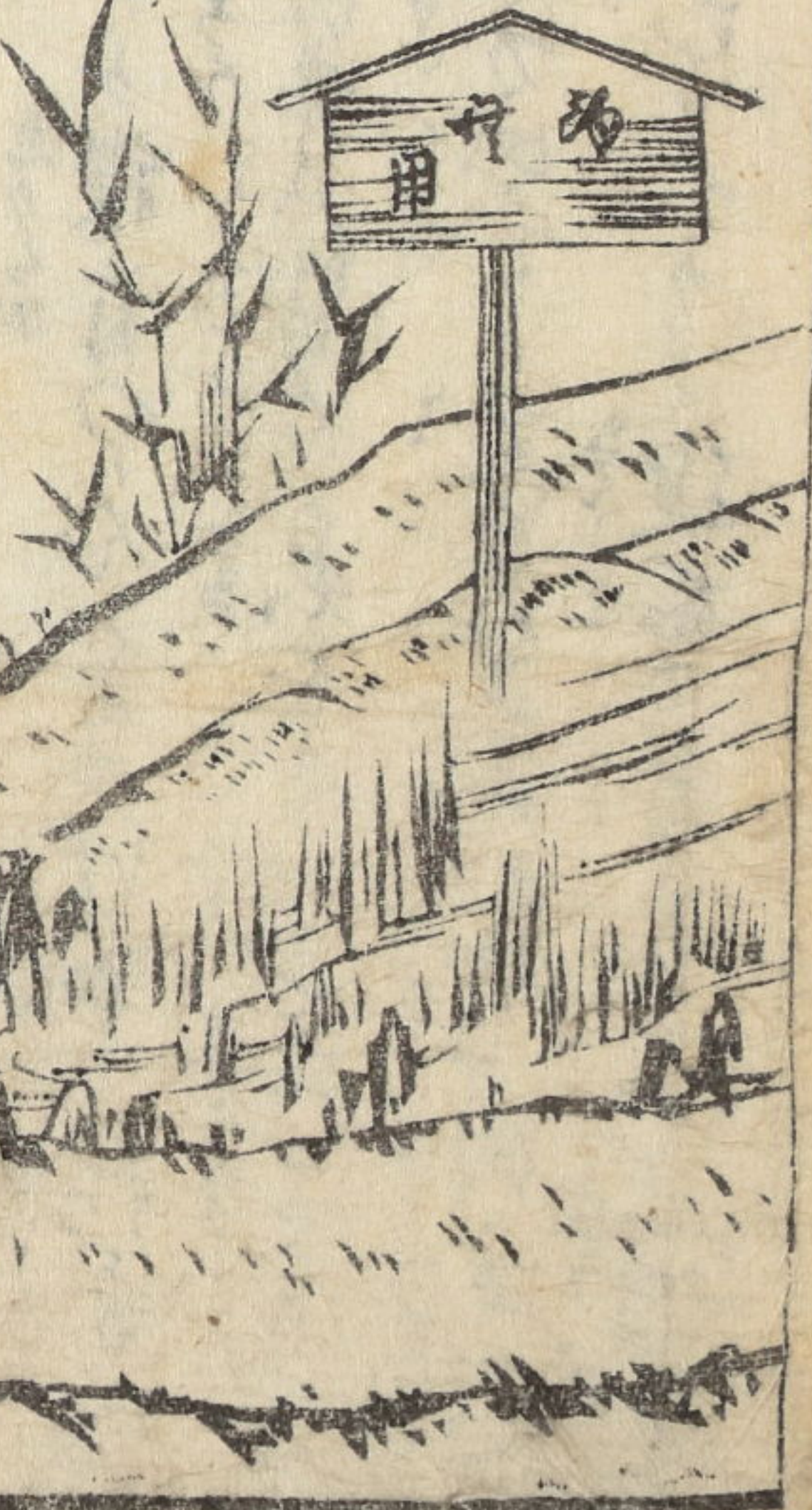
あんか
ゆ影のふ思られ

えさう^{さき}種^{らん}一うらふあアコモ

のろけ^{まの}まの^なやア及びぬ^な影^なの^な影^なの^な影^な

別^お馳^り婦^のお^な意^のご^うア^の望^まや^のふ^れ巴^か影^の

みんども^や食^をを^るる^やう^ごア^の眼^のハ^の實^んであ^は



お^ま負^け小^こ鼻^なの^の低^ひ一^のま^のあ^のハ^のア^のヨ^のコ^のウ^の

え^のあ^のふ^のら^のく^のい^のら^のは^のあ^のみ^のえ^のな^のこれ^のです

情人^いの^の三^の田^の人^のの^のあ^のせ^のを^の情人^のが^のあ^のら^のと^のあ^のん

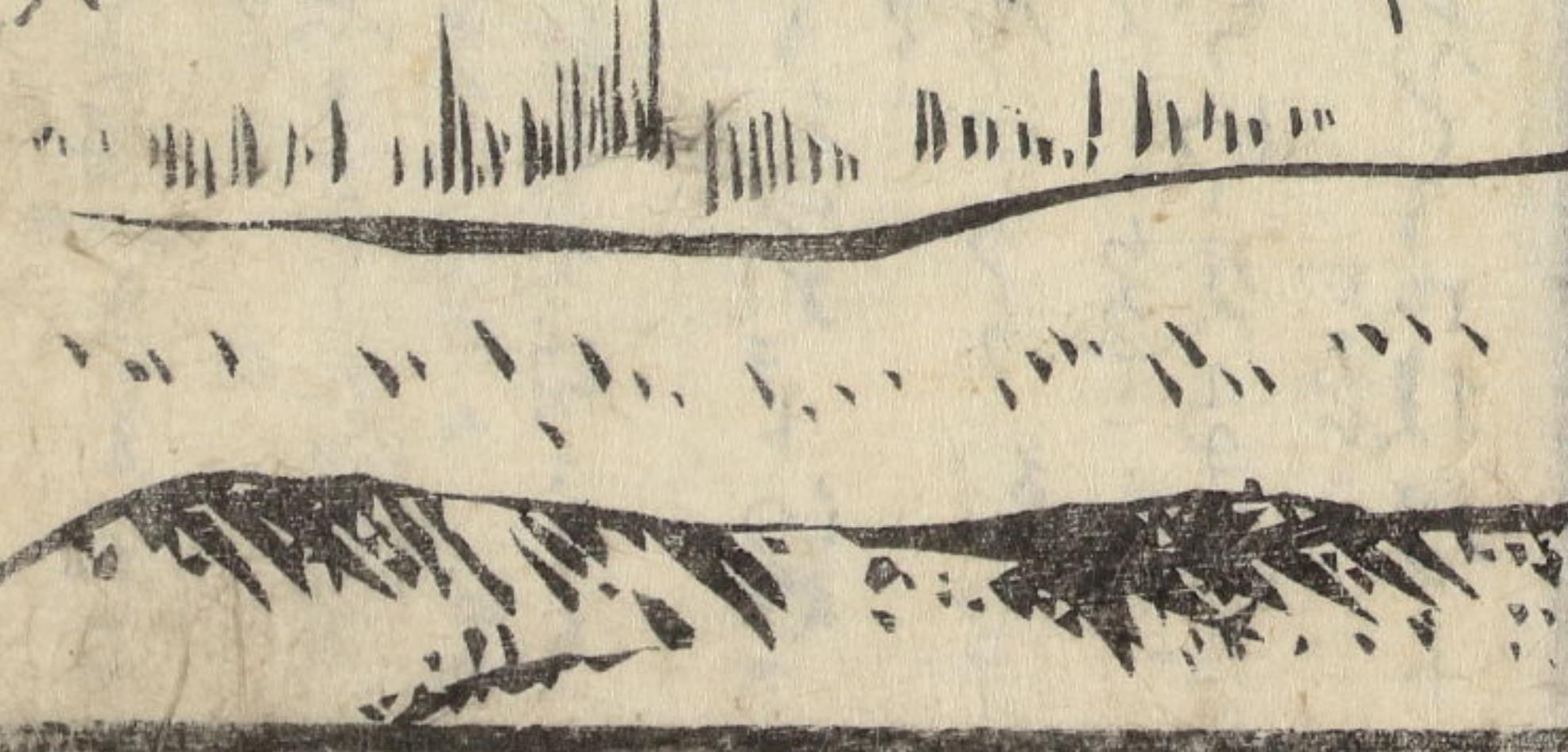
を^のあ^のら^のと^のあ^のん^のト^の途^のふ^のお^のら^の居^のる^の犬^のの

尾^のを^の踏^のめ^のふ^の一^のキ^のヤ^のン^のと^の一^のを^のれ^のら^のう^のね^のが

情人^いが^のあ^のら^のハ^のア^の一^のを^のれ^のら^のう^のね^のが

から^の信^の実^のの^のん^のと^のア^の一^のを^のれ^のら^のう^のね^のが

毛^のが^の根^のを^のら^のひ^のひ^のの^のア^の一^のを^のれ^のら^のう^のね^のが



えんごめおまゝアト吐きまぐる痛むを堪へ後方の尾へ
とんくと後をひきまゝ失くさるる二個の者へ智の方へ
性まぐる一月へ婀娜まて田毎不後る年のもまごえ
りぐりぐりやぐまごらのがあのをまてみんとあひのこ
まひまゝるる七條へまぬらうまらうの附者下あ
りてとらまらうトひ声も遠なるまて淋しとらまら
りけががぬ敷風のそよくと料木の葉のこまへけり
作者曰は末を柳が枯しゆんとあゝる巻を

九十八

久くそあゝるアト是より口編へ心を抱
きを翻しと他者の物のかゝりかゝり故が
程を翻し不本と目出交は尾とまら
ものあり

一刻 梅之春巻の九終

